
Fact

ういん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a c t

【Nコード】

N 4 9 4 0 M

【作者名】

ういん

【あらすじ】

それは、事実。

夢なんかじゃない、ホントの出来事。

（前書き）

前回作者が上げた『Dream』の対となっておりますので、よろしければそちらもどうぞ。

ごめん。 ごめん。

ごめんな潤也。

俺はまたお前に酷いことをするよ。

自分勝手な思いで、きつとお前をまた辛くしてしまう。

でも、もう耐えられないんだ。

潤也の笑った顔が、見たいんだ。

F a c t

潤也の買ってきてくれたエプロンを身につけ「よしっ」と二つ気合
いを入れる。

次に冷蔵庫の中をチェック。

ジャガイモ、ニンジン、豆腐、ソーセージ、もやし、牛乳。

おっ、チーズもある。

今日は結構寒いし、せっかくだからグラタンでも作るか。

マカロニもあるはずだし。

料理本を出してきて作り方を確認。

早速調理に取りかかる。

ふふっ、グラタンなんて久々だなあ。あとはコンソメスープとサラ
ダをつと・・・

そうこうやっているうちにあとはグラタンが焼きあがるのを待つのみとなった。

そろそろ潤也を起こそう。

ソファーの上で寝息をたてる弟へまずは普通に声をかけてみる。

「潤也、潤也ー」

「・・・・・・・・」

反応なし。

次は少し大きい声で。

「潤也、早く起きろ。」

おっ、ピクツてなった。

もう少しだ。

最後の仕上げに耳元で叫ぶ。

「おい潤也！じゅ・ん・や！！！」

潤也は文字通り飛び起きた。

「うわっ！なっ！？兄ちゃん！？」

「ふう、やっと起きたか。そんな所で寝てたら風邪ひくぞ！」

呆けた顔でキョロキョロと周囲を確認する姿が小さい子供のように見えて少し笑える。

すると窓から冷たい風が吹き込み、目の前の弟がぶるりと震える。

「ほら、いわんこっちゃない」

「さっきまでは日が当たってて暖かったんだよ」

そう言って苦笑する潤也。

まったく、もう少し考えて行動しろよ。

「もうすぐ夕飯できるから、テーブルの準備頼むよ。」

そう頼むと、すぐにテーブルを片付けてくれる。

よしよし、我が弟ながら良くできている。

「兄貴！今日の夕飯は？」

「今夜はグラタン」

片付けが終わったことを確認して、俺はグラタン皿を運ぶ。

「おおっ！うまそー！」

「さあ、冷めない内に食べよう。」

「いただきますー！」

「うんっ、うまいよ兄貴！」

良かった。

嬉しそうな潤也の声に、自分まで嬉しくなってしまう。
そこでふと思い出した。

「そういえば、何でさっき兄ちゃんだったんだ？」

「へっ？」

何のことだかわからないって顔してるな。

「さっき潤也を起こした時に確か”兄ちゃん”って言われたような
気がして・・・うん、確かに言ってた。」

「そうだったけ？」

「そうだよ。何か夢でも見たのか？」

「うん・・・あっ、見た！あんまりよく覚えてないけど。何か
さ俺が子供で綺麗な原っぱにいるんだ。それでいくら探しても兄貴
が見つからなくて、不安で・・・そんな夢だった。」

っ！

・・・潤也。

そんな夢を見てたのか。

暗くなったであろう表情を隠すため、グラタンを食べる振りをして
俯いた。

「それで”兄ちゃん”だったのか。でもなんか懐かしいな。」

「何で？」

「兄ちゃんだなんて、随分前から呼ばなくなっただろ？」

「そうだっけ、兄ちゃん？」

「あはは！」

それからは他愛のない会話をしながら食事を進めて、その後2人で片付けをした。

2人で立つにはうちの台所は少し狭かったけど、それがいつもと変わらない日常だった。

変わらない、はずだったんだ。

ああ、もうお別れの時間だ。

こんなちよつと前までは当たり前だった時間も、もう終わり。

今後俺がこんな風にお前とられることは、絶対にない。

だからこれが最後の挨拶。

今できる一番の笑顔を作って言っ。

「潤也、おやすみ。消灯ですよ。」

「おやすみ兄貴、消灯ですよ。」

そう笑顔で返して部屋へに戻っていく潤也。

その背中が見えなくなるまであと5歩。

大丈夫、まだ俺は笑顔だ。

あと4歩

鼻の奥がツーンとしてきた。

あと3歩

視界がだんだん霞んでくる。

あと2歩

ダメだ。まだ泣いちゃダメだ。

あと1歩

溢れそうになる涙で潤也の姿が見えない。

そして、パタリと扉が閉まった。

「っ！・・・潤也。じゅんやつ！！」

口を抑えて声を出さないように泣く。

「じゅんや、ごめん。ごめんな。」

ごめん。

こんな事したって、またお前が辛くなるだけだってわかってたんだ。でも、ダメだった。

お前のそんな辛そうな顔、もう見てられなかったんだ。

潤也、お前はきつと今夜の事は夢だったのだと思うだろうね。

でも、違うんだよ。

俺は今日、ここに現れた。

それは紛れもない事実なんだよ。

潤也。

今日はありがとう。

お前の何の陰りもない笑顔を見て、俺凄く嬉しかったよ。

できればこれからもそんな風に笑っていて欲しいな。
なあ潤也。

勝手に死んでおいてなんだけど、早く元気だせよ。
俺はずっと、空からお前のこと見てるからさ。
だから・・・

「潤也」

ああ。

せめてこの声だけでも、お前に届いたらなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940m/>

Fact

2011年1月28日15時18分発行